法王：人は慈悲で救われる

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

人は慈悲で救われる、道徳では救われない

フランチェスコ法王は、現在、次のような内容の本を用意している。その骨子を紹介しよう。

> 我々は、世界は変えられないという態度をとっている。しかし、キリストの教えには世界の歴史を変える力がある。キリスト教はその伝道と共に新しい人間観を広めてきた。その典型的な例が、聖パオロと言えるだろう。彼が入信した時、神が聖パオロの前に現れ、彼に慈愛の目を向けたのだ。神は、このキリスト教徒を迫害してきた人間を、慈悲で導いた。5世紀に特にアフリカで広まったペラギウス主義[(1)]に惑わされてはいけない。この主義には、信仰というものが、道徳に入れ変わったところがある。キリスト教は、世界的な動向や、その折々に現れたイエスの霊によって変わったのではない。すべての川は、大きな川も小さな川も含めてこの2000年の間、つながりあって滔々と流れているのだ。慈愛というのは、感動から、驚きから、恩寵から生まれる。歴史的に見て、当初より、キリスト教徒の慈悲は、それを必要とする人たち、すなわちとても弱い立場の人間である寡婦、貧者、奴隷、病人、また社会から疎外された人々に向けられていた。苦しみに喘ぐ人と痛みを分かち、不公平を糾弾し、平等を求め、与えられた境遇に寄り添い、そこから抜け出す働きをすることだ。
>
> 汝は、救けを必要とする人を救けるのだ。汝の財産は汝のものではない。財産の管理を任されているだけである。財産は必要な者に公平に分け与えるのだ。

公式行事の変更

昨年（2020年）3月、4月、5月半ばまで、ヴァチカンでは、公式行事のキャンセル、行事の変更、儀式の時間的変更などがなされた。しかし、5月の下旬より規制が緩和され、マスクをかけ、人と人との距離を1.5m以上保てば、集会を開いてよいということになった。そのために、教会のミサも法王の毎週日曜日のアンジェルスの行事も再開された。ここで、人々の気分はやっと解放されたという感じで、自分中心の考えもいろいろと出て来た。時は夏。例年のようにヴァカンスの時期になり、人々はあちこちに出かけた。ところが、7月、8月とヴァカンスが終わって帰って来た時、特にクロアチア、マルタ島、スペイン、ギリシャから帰国した人たちの多くに、コロナウイルスの陽性の反応が次から次へと現れた。それでもまだ、9月、10月はかなり平穏無事な日が続いた。

ヴァチカンの日曜日、正午に行われるローマ法王のアンジェルスは、例年のように、ローマ法王を一目見ようという旅行者はいなかった。また、社会的距離をとることを義務づけられたので、参加する信者も少なかった。そこで12月のクリスマスをどのようにするかという問題が起きてきた。12月8日は聖母マリアの「無原罪のお宿り」の聖日だ。スペイン広場の南に位置する柱の上に立つ聖母マリアの像があるが、例年では午後4時には法王の臨席の下、ローマの消防団がハシゴ車を使って、その聖母マリアの腕に花輪を捧げるという儀式が行われる。しかし、コロナ禍の中にあって、多くの人は集まってはいけないことになっているので、法王はその場に臨席しないことを早々と表明していた。スペイン広場の聖母マリアの像への献花は67年間続いているが、中止になった。12月5日より8日まで、4日間の連休となり、8日には大勢の人が出てくると心配されたからだ。12月8日の早朝、夜明け前の7時ごろに法王は雨の降る中、広場の聖母マリア像の柱のたもとに、傘をさしてやって来て、聖母マリアに花輪を捧げていたが、その姿に感動した人も多かったようだ。

こうして、12月24日、クリスマス・イヴを迎えた。例年だと、ヴァチカンのサンピエトロ教会に、枢機卿をはじめとして、ヴァチカンの各国大使夫妻、キリスト教共同体の代表者が集まり、教会の中は人でいっぱいになるところだ。しかし、ミサの場所は、教会の中央部ではなく、教会の一番奥の部分が使用されていた。コロナ禍のために、夜は10時以降、家から外出禁止となっているので、ミサは例年より早く始まって、早く終わった。つまり午後7時半に始まり、9時ごろには終わった。人々は家に帰り、夜中零時にキリストの誕生を実際に祝ったのである。

13名の新枢機卿が誕生

昨年11月28日、法王フランチェスコは7回目の新枢機卿任命式を行なった。これはすでに1カ月前の10月25日に誰を任命するか発表されていたものだ。全員で13名が任命された。その中で特筆されることは、一つ目はヴァチカンの財政問題で、ロンドンの建物を購入したベッチュー枢機卿が解任されていたので、その後任が決まったこと。二つ目はアメリカ・ワシントンから初のアフリカ出身のアメリカ人ウィルトン・グレゴリーが選ばれたことだ。今回13名の任命者の内訳は、イタリア人は半数以下の6人、80歳以下の法王選出の選挙、つまり、コンクラベに参加できるのが9人。4名はすでに80歳以上で、コンクラベの参加資格は無い。参加可能者は、イタリア人だけに限ると半分の3人だけだ。今回の任命で、枢機卿の総数は229人となった。そのうち、コンクラベ参加資格を持つものは128人である。ヨーロッパ人は53人、ラテンアメリカからは24人、アフリカ人が18人、アジア人が16人、北米アメリカ人が13人、オセアニアから4人となる。229人の枢機卿のうち、現法王フランチェスコによって任命されたのが73人となる。それゆえ、次期法王は現法王フランチェスコの息のかかった人になるだろうと推測されている。イタリア人が法王になる確率はますます低下していくようだ。

今回の任命式には、フィリピンのカピスの大司教ホゼー・フェルテ・アルヴィンクーラ氏とボルネオの使徒代理コルネリウス・シムの両氏は、コロナ禍によるパンデミックのために儀式に参加することはできなかった。

［註］

（1）ペラギウス主義：ペラギウスは禁欲主義を加味した自然主義的道徳論を打ち出した。彼はイギリス人で、ローマやカルタゴに赴いて教えを説いたが、後に異端とされた。